

婦人子ども

第十四卷
第四號



大正三年四月五日

フレール會

第十四卷第四號目次

學齡前兒童の發達と教養(三) 入澤宗壽
多様にして統一ある一時限

保育實況

日野清子

『ジェーン・アイヤ』(五)

岡田みつ

船待ち

わかき父

大阪の童謠 (二)

浪花の子守

子供の間食

石塚保吉

躰方の進的

檜崎淺太郎

雜錄

○東京市保育研究會發會式
○東京市教育會主催幼稚園講習會

フレーベル自傳 (第四回) 倉橋惣三譯

本誌定價

一冊 郵稅共金拾壹錢 六冊前金郵稅共六拾錢
拾二冊同金壹圓貳拾錢 郵券代用一割増

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ
込み下さい。直に御送本致します。(振替口座東京一七二六
六番)

本會宛御用務

本會宛諸般の御用務は左の如く願ひます

(庶務上保姆紹介に關する件を含む)の御手紙は

東京市小石川區久堅町七十四番地フレーベル會事
務所宛

會計事務は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内、
雨森劍宛

本誌編輯の御用務(寄稿、廣告等)は東京府下代々
木山谷一二四倉橋惣三宛

大正三年四月四日印刷
大正三年四月五日發行

編輯兼發行者 倉橋惣三
東京府豐多摩郡代々幡村大字代々木山谷一二四

印刷者 平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場
東京市小石川區久堅町七十四番地

發行所 フレーベル會

フレーベル紀念會

四月二十一日(火)午後三時より

東京女子高等師範學校附屬幼稚園に於て

講演

フレーベルに就て

東京高等師範學校教授

乙竹岩造氏

當日はフレーベルの誕生日にあたります。是非多數諸君の御來會を得て、楽しく有益に此の日を記憶し度いと思ひます。

四月

フレーベル會

兒 童 研 究

第七卷 第六號

(大正三年二月一日發行)

(內容概目)

社會の改善も、人類の向上も、文明の進歩も、國家の發展も、詮じつむれば、ただ善良の兒童を得るにありと言ふことになる。兒童を愛する國は興り、兒童を顧みざる國は亡ぶ、これは千古萬古變ることなき箴言である。兒童の研究は、ひとり教育家や、醫家に一任して置くべきものではない。世の父兄自ら研究すべき筈のものである。兒童の研究は即ち我を愛し、家を愛し、國を愛し、人類を愛することになる。兒童のために最善を謀らざる家庭は決して幸福を望むことは出來ぬ、我儕は何人も兒童の研究に興味を持たんことを切に希望してやまないものである。

在姫路陸軍懲治隊懲治卒の精神狀態視察報告

醫學博士

醫學博士

文學士

ドクトル

文學士

醫學博士

醫學博士

文學士

- モンテッソリ氏の敎授用具に就て(下)
- 兒童書陳列會を觀る
- 玩具に就て(承前)
- 兒童生活の特色(承前、完)
- 子供の取扱に就て一二の注意(承前、完)
- 母親の不注意から來る子供の病氣(二)
- 初學兒童の色の命名能力
- 紐育に於ける乳兒保護の教育
- 小兒用人造乳
- 乳兒の夏時吐瀉症

三宅 鐵
 杉江 清
 河野 三
 三田 啓
 高島 三郎
 倉橋 惣三郎
 高島 平三郎
 唐澤 光徳
 ステンチンゲル
 ボルシヤル
 エブスタイン

兒童研究代價 一冊 金拾六錢 ○一年分 金壹圓八拾錢

發行所 東京市本郷區駒込千駄木町五〇

【振替口座東京二三九五】

賣捌所 神田東京堂・本郷盛春堂・本郷吐鳳堂・京橋東海堂・京橋北隆館



第四卷第四號

學齡前兒童の發達と教養(三)

文學士 入澤宗壽

四、個性化の時期(四歳より六歳まで)

此の時期の特質、前の時期即ち二歳の始めより三歳の終りに至る模倣及び社會化の時代に於けると同じく、この時期中也社會的影響は著しいけれども、此の時期に至つては前よりも多くの人々と相觸接し従つて發達の方向が幾分變つて來る。兒童は自然及び社會的環境から精神的材料を甚だ多く集め來つてそれが意識的自我に組み込まれる兒童は今や事物や人間から獨立して自分の精神生活を支配し想像に於ても實際に於ても出来る丈け愉快で調和的な意識状態を得るために、獨立な人間として自分の地位を占めて來る。固より精神生活多くの點に於て他人と共通な處があるけれども、その大部分は自分自身のものとして所有して來る。彼は最早や單に他人のすることを模倣するので無く、模倣する事、取り入れる事について取捨撰擇を施すのである。なほ進んで自分の精神状態を他人に印象しやうとするに至るもので、それが他人のを受け入れるよりも一層興味を感じて來る。これを要するに此の時期に至れば、兒童は家庭の自然的及び社會的遠境よりも一層

廣い環境に接して來て、前の時期よりは大に完全に僻性的人格として精神的組成と人格と發達をなし遂げるのである。

兒童は自然の稟賦といふ點からいへば最初から個性の大部分を所有して居るのであるけれども、此時期に及んで一層意識的に其精神的個性を變化し發展するのである。かくして此時期の終りに著しい精神上の特質は青春期に入る迄變らないほどに完全に個性を發展して來る。六歳の兒童は三歳の時より全く變つて居るが、十二歳の兒童は六歳の時と殆んど同じの特質を備へて居るのである。

自己主張。新意識的人格が個性化されるためには兒童はいつも他人の精神生活を分ち取らないので獨立に行動し、自己流にその經驗を組織しなければならぬ。これが三歳に近い兒童に於て一層獨立的になり、多かれ少かれ一般に反抗心を現はして來る理由である。

時としては個性が何等他人との衝突なしに發達

することもあるけれども、大部分は衝突する時期があり反抗が屢あらはれて來るものである。勿論これは兒童の健康がすぐれない時や又は欲求が他人から妨げられると何時でも此の現象は起るけれども、健康な兒童でも此の時期には反抗があらはれて來る。これまで兒童は他人を模倣し、その示唆に従つて來たのであるから、此の時に表はれ來る個性的自我が共通自我の中に失はれて仕舞はぬためには反動が必要であるやうに思はれる。それ故に一層意識的の形に於ける自己主張の本能が活動的になつて來て、他人がなす如く將た他人の命する如くに行動しないで、幾らか違つた事いな通常は反對なことをやり又は稀には何もやらないといふ様になる。かくて兒童は反抗や片意地を通すのであるが、通常この時期に現はれる片意地は前時代に於て模倣的暗示で導いて行くやうに、反對の暗示でうまく導き得るものである。

兒童と周圍の人との關係が一般愉快であり又共

通の意識がうまく發達する場合には此反抗時期は短くてすむもので又かくある可きものである。かかる状態の下に於ては、兒童は自分の經驗から、爲ていゝ行動と爲てならぬ行動とを發見し、感情の個性は或範圍の下に自由の行動を許され、自身の自然の趣味と傾向に於て行動し發達する。意識的の個性が無意識な性來の傾向から發達し、習慣と前時代の共通意識とを得て、意識的自我が他の矛盾衝突なしに家族の共通意識の分化せる部分自然的部分として發達して來る。

此の時代に於ても尙ほ他人を模倣はするが、それが他人の目前でなく、他人の居ない場合に多く模倣するやうになる。かくして個性を擴張し自己選擇と自己支配といふ事を覺えて來る。

併しこういふ發達は家庭の状況がいゝ場合に於て見るところのもので、多くの場合には、たとへて共通意識がうまく發達しても、又兒童の人格が單にその時々他と衝突するに過ぎないにしてもこ

の意識的個性發達の危機に於ては、兩親の人格と兒童の人格との間に大なる衝突が起り意識の共通を破り多少の永續的矛盾を残すものである。この現象は、一部は兩親が此の時期を以て服従を教へる時期だと心得、兒童の好愛と遊戯とに反對な方向を強めることに基いて居る。兩親は賞罰を以て兒童を服従させる事は出来るが、それがために前の時期に社會的手段によつて與へた影響を殆んど無くして了ふ。且兒童はこれに依つて賞賛と非難との外は何も注意しなくなり、進んでは結果のみに注意し、結果さへ苦痛でなければ非難でも喜んで受けるといふやうになる。

前の時代に於ては兒童の感情生活は家庭の影響によつて強い印象を受けるが、この第三の時代に於ては活動的意志特性の基礎が形成せられ權威に對する一般的態度が決まる。兒童は茲に自分に對して期待される事柄を知り、その期待に合して行べふきか、反對して動作すべきかといふ行爲の觀

念を形成して來る。

兒童に共通の意識を保ち而も同時に個性をして自由な意識的な發達をさせるには、非常な賢明な取扱が必要である。此の取扱の詳細に立ち入ることとは茲に出來ないけれども、一般的注意を列擧して見れば次の如くである。

(一)前時代の無意識的習慣中で望ましいものはよく保存しなければならぬ。(二)共同意識は兒童をして共同目的に對する共同作業をさせることに依つて支持しなければならぬ。(三)兒童が自分の經驗で行動の結果を知り得る様な機會と共に撰擇行動の自由を許してやらなければならぬ。(四)兒童が自己及び他人の安全幸福のために爲なくてはならない事に對しては、自然力なり人間の影響なり、また間接直接の賞罰を以て導かねばならぬ。
自己と他人の意見。此の時期に於ても言語は、前時期に觀念發達のために重要であつた如く意識的個性の發達に重要な働をなすものである。兒

童の行爲についての名稱が與へられると、それが意識の中に著しい地位を保つて來、特質の知識が進むほど行爲の種類も増して來る。故に望ましくない特質の名稱は出來る丈け知らさせないで置き、望まじき行動は了解が出來る丈け早く名を教へてやるべきである。フレーベルが望まじき特質の名を與へることを兒童教養の重要な手段としたのは甚だ正當である。

かく名稱を與へて明瞭なる意識に上す外に、その特質が、周圍の人の言語や行動により現はして傳へる事が出來れば、一層有効である。前に見たるが如く、兒童は前時代に於て事物に對する觀念を他人の意見によつて形成するやうに、この時代に於て、自己の個性に對する明瞭なる意識に到達したとき自己と他人の行動の差異を考察するよりも他人が自分及び他人に對して爲した行動によつて支配を受ける。例へば他人が自分を卑怯だといへば卑怯になり、他人が大膽だといへば大膽な行

動をする。それ故に、兒童の前で兒童の事を話す
には餘程注意しなければならぬ。

希望と理想 此の個性化の時期に於て割合に早
く兒童は理想を形成し始める。それは單に好愛す
るもの、欲求するものについて計りでなく、希望
し願望するものに就いて形成する。これらの理想
は理想上兒童に愉快に思はれるもの、經驗で學ん
だもの、両親から教はつたもの、或は賞賛と聯想
したものの等色々である。想像上、兒童は凡て欲し

い物の所有者となりそれを得る力も特質も凡て持
つて居るものと思ふ。經驗に依つては所有、行動
存在の可能について幾分知つて來るが、周圍の人
から聞いた誇張の結果をも信じて居る。此の初期
に形成せられたる理想は兒童の行爲及び發達に大
なる影響を及ぼすものである。固よりこの理想は
絶えず變化し又何時も行動を支配するといふので
は無いけれども、青春期を除いては此時期ほど理
想の影響が大なる時代はないのである。(未完)

多様にして統一ある一時限の保育實況

神戸市私立信成幼稚園長 日 野 清 子

去る三月六日京都より檜崎先生が心理學講習の爲御出張あそば
されました折柄、當園に御出で下さいまして親しく保育の状況
を御視察下さいました。其の時に胸圍の狭き幼児松組の保育を
見て戴きましたが、思慮ある保育の仕方だから其實況を書いて
出せよとの仰せでございました。經驗目猶淺く、到底皆様に
御覽を願ふ程の事でもありませんが、先生の折角の仰でござい
ますので以下當園の状況の一端を申し上げ併せて當日先生に御

覽を願ひました室内保育の順序を概略茲に認めまして皆様方の
御批評を御願ひ申します。

一 保育の一般方針

伊太利のモンテッソーリ女史が感覺的方面に於
て個人的取扱をなして大なる成功をなし、廣く世

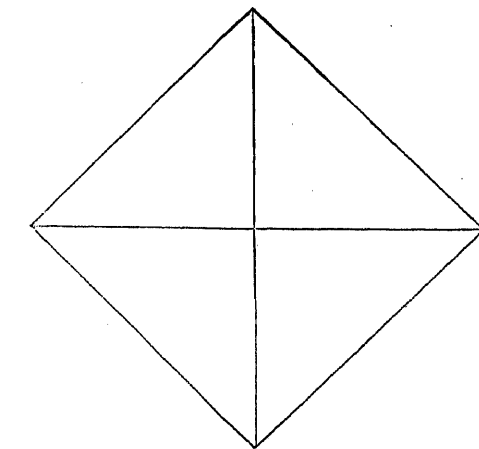
界に於て賞讃を博しゐることは皆様も御承知の通りであります。幼児の保育に於て、その感覺機能を完全に且つ圓滿に發達せしむることは、實に緊要なる任務でありますが、幼児の身體を全體として完全なる發達を遂げしむるに

は、幼稚園保育の最も注意すべき重大任務であらうと思ひます。特に近時物質的進歩と共に、身體の健康状態が益々不良なる結果を見るに至りし今日にありては、全體として見たる身體の健康を保持することは、愈々切實なるものであらうと思ひます。この見地から我が幼稚園に

於ては昨年四月以來積極的に幼児の身體を完全に發達せしむる事に最も力を注いで、其の方法を研究せんと勉めて參つたのであります。

神戸市の各園に於ては、近時都市の幼児の身體

が益々薄弱となる傾向あるに顧み、之を矯救することに注意し、其の方法の一として毎月一回は必ず保母の手にて出來得るだけの身體検査を行ひ、以て救済の策を講せんと企て、居ります。我が園



第一圖

に於ては其の身體検査の結果、從來執り來つたる年齢別による幼児の組別法を全く放棄して、茲に身體の健康状態を基礎としたる組別法を採用したのであります。この事に關しては、其の一端を過般開催せられたる關西教育博覽會に出品して、世の識者の御高評を仰いであります。而し

て組別の標準は、三島博士の著なる「日本健體小兒の發育論」中に示されたる、所謂中等發育標準表により、身長、胸圍、體重の三者を取調べて其の各々の發育の不良なる幼児を集めて之れを一組

に編制いたしました。即ち各組には満三才より満六才以内の各年齢の幼児を包含してゐるのであります。それで身體の弱い幼児の爲めに保育室内に於ける色々な手技を致させます時間を減じて、多く動作遊戯、運動等の時間を多からしめてゐます。然も其等遊戯、

運動等は主として各組に身體的缺陷を救済するに適當したる種類の運動を、行はしめるのであります。

室内に於て手技を行はしむる際にあつては、同一組に同一の事柄を行はせる場合もありますが、然し其年齢に應じて各々異なる仕事を行はしめる事も必要であります。否是非とも其發達に應じたる仕事を行はしめなければなりません。こゝに於て同一時間内に於て、各組にては年齢に應じて三種の異なる手技を行ふ場合が多く存するのであります。又同一種類の仕事であつて、

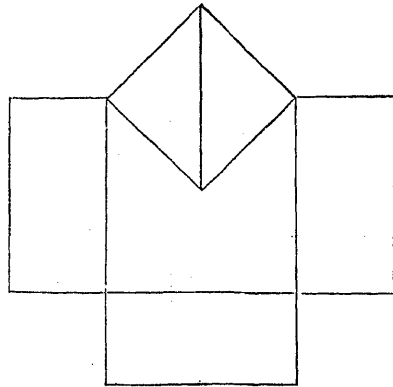
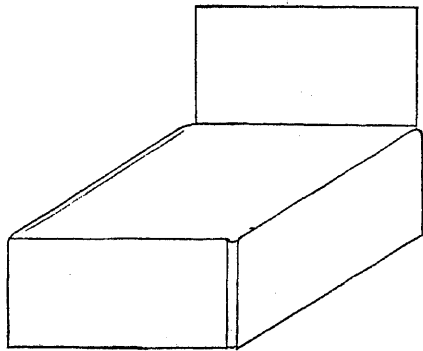


圖 二

簡單なるものから次第に複雑なるものに進む三種の仕事、各年齢別に行はしめる場合もあるのてあります。談話に於ては各組を全體として話すのでありますが、材料に依つて何れの年齢の幼児を主とするかといふことを定めて取扱ふのであります。

躰の點に就ても此の組別の方法に依る時には年齢別に依りたる方法に於て得る事の出來ない特點があるやうに思はれます。例へば手技の場合等に於て協同一致に依つて一つの仕事を成し遂げる愉快を具體的に之を感知せしめることが出來ます機會が多いやうに思はれます。又長幼相助け相尊ぶの興味を適確に味はしめる機會も多いやうに思はれます。又模倣に依つて不知不識の間に、年長幼児に躰することから、年少幼児の良習慣を養成することも

出來ます。現時幼稚園の保育に於て意志力の鍛錬が充分に行はれないで、保育を受けたる幼児が、却つて家庭に於て教育せられたる幼児に比較して往々放縱に陥り易いとか、辛抱強くないとかいふことは一般に非難せられる缺點であるやうに思はれます。意志の教育は、現時教育上大に奨勵鼓吹せらるゝ點でありまして、理論上動かすべからざる根底があると承つて居ります。若し保育に於て果して以上の缺點があるといたしまし



第三圖

てならば、それは幼児の躰の上から見まして、直に改良すべき一大事と思ひます。本園に於ては又此點に顧みて、多少の注意を拂つてゐるのであります。特に幼稚園の保育を終へて、將に小學校に入學せんとする幼児に對しては、他日眞面目なる一定の課業を學習してよくその目的を達するに違算

なからしめんが爲めに、特別なる躰をなさんと勉めてゐるのであります。例へば手技の時間等に於ては、年少幼児に對しても自由に談話を交換する事を許してあるに拘らず、年長幼児に對しては絶對に之を禁止するが如きは、此目的を達せんが爲に取つて居る方法であります。此の場合に於ても他の幼児が談話せるに、己は保母の命令に服従して一切口を噤むといふが如きは、更に一層の意志力を必要とするのであります。

一 當日保育順序

一、組名、松組

一、幼兒數、四十名（大兒十三名、中兒十三名、小兒十四名）

一、組分法、全園兒の内胸圍と體重との發達不良なる幼兒（但年齢不同）

一、保育事項、摺紙及積木

一、保育時間、三十分間

一、準備 摺紙、鉛筆及共同積木、啞鈴、

一、保育の順序

1. 此の月末より舊湊川公園に於て、共進會を開催せらるゝ由にて、すでに工事も

着々と捗れる由を幼児に話した

るに、幼児中の九分迄は既に現

場を見たる趣申したり。即ち今

の時間は積木と摺紙の御遊びを

なす由を告げ、又其の積木にて

共進會の小模型を作り、其の共

進會の落成式にお客が招待せら

れしを以て其人が袴屋へ袴の注文をなし、共進會

よりは式日入用の椅子を椅子屋へ注文をなす由を

話す。

2. 四名の幼児（大兒二名、中兒二名）を指名して

保姆の前に來らしめ、命じて隣の遊戯室に於て共

同積木にて共進會の小模型を作るべきを命じ、一

方餘兒には大兒中兒小兒毎に當番幼兒をして摺紙

材料（大兒は四吋角のにて黄色、中兒は五吋角に

て紫色、小兒は四吋角にて赤色、）を配布せしむ。

其間四名の幼兒を隣室に伴ひ行きて共進會の正門

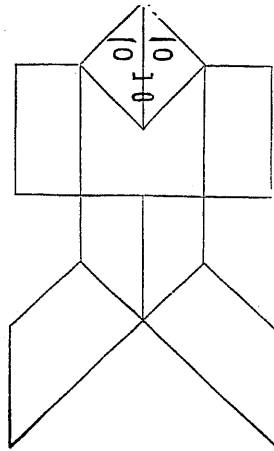
及横門の位置を定めしめ、啞鈴

を用ひて塀となすべしと言ひ置

きて各自に工夫して作らしむ。

（第五圖）（印刷の都合にて遺憾な

から此の圖を略す。編者）



第四圖

圖 3 餘兒の内小兒は人の形、中兒は椅子屋になりて椅子、を大兒は袴を摺むべし、と命じ先づ初

めは全兒共に座蒲團を摺ましむ、（第一圖）次には

同じく全兒をして「人形」を摺ましむ。（第二圖）

4. 小兒には摺みし人の形に鉛筆にて顔を畫かし

む。中兒には人の形より椅子を摺ましめ

（第三圖）出來上りたる幼兒より隨意に隣室に共進

會へ持ち運び任意に共進會場内に配置せしむ、かくて「お客様のお來場を待ち合しむ。大兒には人の形より袴を折らしめお客様のお所へ持ち行き糊を用ひてお客様に穿かしむ、(第四圖)着せしめたる後は隨意に會場に赴かしめて中兒と共にお客様の入場を待ち合す。

5. お客様は小兒之れを持ちて「オルガン」に合せ

『ジエーン・アイア』(五)

|| 英文學に現はれたる子供(十六) ||

岡 田 み つ

て行進し、會場内椅子を配置せる所に赴きてお客様を椅子にこしかけしむ。
6. 全兒共進會外に、一列圓形を作りて「オルガン」に合せて共進會落成の唱歌を歌ひ、次に共進會萬歳お客様萬歳松の組萬歳と唱へて式了る。
7. それより全兒間隔を取りて體操をなす、主として胸の運動をなさしむ(凡五分間)

「プロックルハースト」さん、三週間前に上げた手紙に申上げたと思ひますが、此子はどうも私の望むやうな氣質きだてではありませんから、もしローウツド女學校へ入學させて下さる場合には、校長さんと教師方とに厳しく監督をして頂きたい

ので、別けて此子の一番悪い缺點の、表裏へうりのある癖を御注意下さるやうに願ひます。ジエーン、御前が此方を瞞たましたりしない爲に、態とかうして御前のまへで御話して置くのだよ。
ジエーンが、リード夫人を怖れ且憎むのも無理

はなかつた。ジエーンを慘酷な目に遇はずのが、夫人の性分なのだから、ジエーンは夫人の前に居て、楽しいと思つた事はなく、いくら細心に其命をきゝ、いくら御機嫌を損せまいとしても、ジエーンの努力は反撥つけられ、今のやうな語で報いられるのであつた。見ず知らずの人の前で此非難を、ジエーンは心を剝られる思ひで聞いた。今入らうとしてゐる新生活に、もう希望を絶たせるやうに、伯母が仕向けて居るのが、ジエーンにも薄く覺られた。伯母は、自分の行先に嫌疑と不親切との種を播いてゐるなと感じた。ブロックルハーストの目前で、自分がわるがしこい、小悪らしい少女にされてしまつたのが解つた。此損害を除くにどうしたら宜からう。ジエーンは、泣き聲を抑へ、涙をいそぎ拭きながら、「方法はない」と心に思つた。

「表裏のあるのは、子供としては重大な缺點です。表裏のあるのは虚偽と同じで人を欺くもの

は未來にいつて、火と硫黄の池に行く事になつてゐます。兎に角、此子はよく監督いたしませう。校長にも教師達にも申して置きます」。

「どうか、將來の身分相當に御教育下さいませ。物の役に立つて、而して増長いたしませぬやう。休暇の節も、御差支なくば、やはり學校に置いて頂きたう御坐います」。

「御取り定めになつた事は、一々御尤と感服いたします。卑下、謙遜は信者たるもの、持つべき徳で、特にローウツド女學校生徒には大事な點ですから、私は此徳の養成に専ら努力して居ります。生徒が傲慢の心を起さぬやうにする方法を、随分研究して實行して居りますが、効果を奏したらしい證據をつい先頃得ました。私の二番目の娘が、母親に連れられて、ローウツド學校を觀に參りましたが、歸宅して、かう申すのです「御父さん、あの學校の生徒は何て大人しくて質素なのでせう。髪を引詰めて緒つて長い

前掛けをして、着物の外部に衣囊が付いてゐて貧民の子供のやうであつたわ。而してね、皆で母さんや、私の着物を見るンですもの。絹の着物なんか見た事も無いらしいのよ。」

「そういふのが何より結構なので、とリード夫人は答へた。「イギリス全國を探したつて、之程ジエーンに持つて来いといふ學校は、とてもありますまい。釣合といふ事が大切だと私は思ひます、何事にでもね。」

「釣り合といふ事は、信者の第一に心得て居るべき事で、ローウツド學校では、此點に注意して萬事を致して居ります。淡泊の食物、簡単な衣服、純清の住居、剛健勤勉の氣風と申すのが、學校の日課となつて居ます。」

「結構です事。それではどうか此子を入學させて下つて、身分によく釣り合ふやうに御教育下さるやうに願ひます。」

「承知いたしました。此子を御預りしますが、此

子は勿體ない程幸福な境遇に置かれる事を、十分有り難いと思つて貰いたいものです。」

「では、成可く早く此子を遣ります。面倒なこの責任を早く逃がれたいと、實は私も願つて居るのですから。」

「御尤です。では御暇いたします。一二週間の中には歸宅いたしますが、何時御遣しになつても差支ないやうに、校長へ宛て、新に入る子がある旨を知らせて置きます。失禮いたしました。」

「さやうなら。何卒奥さん、御嬢さん達、坊ちゃんにも宜しく。」

「畏りました。おい——此處に「子供の手引といふ本がある。よく祈禱をしてお読み。其中にも虚言者のマーサといふ子供が、不意に死んだといふ話の處をな。」と言つて、ブロックルハースト君は、ジエーンの手に薄い小冊子を渡し、馬車を呼ばせて、歸つていつた。」

リード夫人とジエーンと二人限りになつた。暫時は双方とも無言で、夫人が縫物をしてゐるのを、ジエーンは七八尺隔て、小さい腰掛に坐つて、つくづくとその身體の格好を見、容貌を観察してゐた。ジエーンの手には、虚言者が急死した事の書いてあるその小本を持つてゐたが、心には今迄目前に起つてゐた事、リード夫人が自分の事についてプロツクルーストに言つた語、二人の對話の調子などがまだ新で、心は生身が出たやうにヒリヒリ痛んで居た。あの一言一言はジエーンの耳に入ると同時に、その胸をヒシヒと刺したのであつたが、今や怨恨の情が油然と湧き上つて來た。リード夫人は顔を上げた。其眼がジエーンの眼に行逢つた途端に、裁縫の手は御留守になつた。夫人は、

「彼方へ御出で。子供部屋へ御歸り。」と命じた。ジエーンの顔付きだか何だか、ひどく氣に障つたものらしく、夫人の其言振りは、肝癢を無理に

抑へたといふ風であつた。ジエーンは、立つて戸口へ去つたが、再び戻つて、窓の方へ行つて、更に部屋を横切つて、夫人の間近へ進み寄つた。「是非言つてやらなければならぬ。あんなに亂暴に踏み付けにされたもの、是非逆捻をしてやらなくてはならない。併しどういふ方法でしやうかこの敵に遺趣返しをする力が、自分にあるか」と思ひながら、ジエーンは満身の力を込めてぶつ切り棒の言語で述べ出した。

「私は、虚言者ではありません。若しさうなら、伯母さんを好きだつていふでせうが、私はちつとも好きではありません。世界中でジョンの次に伯母さんが一番嫌い。虚言者の此本は、あなたの子のジョージアナに御やりなさい。あの子が虚言をつくので、私ちやありません。」

リード夫人の手は、縫物の上に靜に休んでゐて、氷のやうな眼は冷やかに、ジエーンを熟視してゐる。

「その他にどういふ言種があるのだへ」と夫人は尋ねた。その調子は、子供に對つて普通使ふやうなものでなく、夫人が喧嘩の相手にいふやうであつた。夫人のその目、その聲がジエーンのあるかぎりの嫌忌の情をそくり立てたので、ジエーンは身體を震はせながら、抑へ難い激昂に驅られて、

「あなたが私の血統ちゆうとでなくつて、眞に嬉しい。生きて居る限り、二度と伯母さんなんて呼ばないから、さう思つていらつしやい。私や大きくないつたつて、逢ひになんか來るものか。人がもしあなたを好きだつたかとか、あなたが可愛がつてくれたかとか、尋ねたら、あなたの事を思ふだけで胸がわるくなるつて言つて、而して非道い目に逢はされたと言つてやる。」

「何處に證據があるへ」

「どこにつて！事實ほんとですもの。あなたは情つてものがない。私には、慈愛親切なんていふものは不必要だとあなたは思つて居るのですが、私に

や其では生きて居られません。あなたは感みなんてものもない。あなたが私を押込めたのを、手荒く亂暴にあの赤室へ入れて、閉ぢ籠めて置いた事を、一生、死ぬまで覚えてゐる。私が辛くて、堪へかねて、泣いて、勸忍して下さいと頼んだのに。しかもあんな目に逢はせたのは自分の子が私を打つたからなんで、理由わけもなしに私を打仆したからなんだ。きく人があつたら、その通りを話してやる。世間の人は、あなたを善い人だと思つてゐるけれど、あなたは悪いわるい酷い心の人だ。あなたこそ虚言者うそつきだ。」

と述べ立てゝゐる中に、ジエーンは今まで經驗した事のない自由勝利などの念が出で、精神が伸々として欣喜の情に堪へられなかつた。何だか目に見えぬいましめの繩が解けて、思はぬ自由の域に脱出したやうな氣分であつた。その氣分も萬更ら據り處の無いでもなかつた。夫人が恐れ怖ぢて、縫物を膝からこへり落とし、手を差し上げ、身を

揺ぶりながら、泣きさうな顔をしてゐたからである。

「ジエーン、御前は考へ違ひをしてゐる。どうしたの。何故そんなに震へてゐるのさ。水でも御飲みでないか。」

「いりません。」

「何か欲しいものはないかへ。私は、御前の爲を思つてゐるのだよ。」

「そうではありません。あなたはブロックルハーストさんに、私は悪い性質で、表裏があつて言つたではありませんか。あの學校へいつて、皆に、あなたがどんな人間で、どんな事をしたか知らせてやる。」

「ジエーンや、御前にはそういふ事は解らないのだよ。子供は、悪い事があれば、矯なほさなければならぬものだからね。」

「表裏をするのは私の缺點ではありません。」とジエーンは、激烈な高調子で怒鳴つた。

「御前は感情が強い、それは御前だつてさう思うだろう。さあ子供部室へ御歸りーい、子だからねー而して少し横になつて御いで。」

「私や、あなたのいゝ子ではありません。横にもなりまん。此處に居るのは厭ですから、早く學校へやつて下さい。」

「そうとも、直きに學校へやるさ」と小聲でリード夫人は言つて、縫物を纏めて、急いで部室を出ていつてしまつた。

ジエーンは、獨り残された勝利を得て。之はジエーンの最奮闘した戦で、又初めて博し得た勝利であつた。ジエーンはブロックルハースト君が立つてゐた敷物の上に、暫時立つて、勝利者としての誇りを獨り味つた。初めは莞爾じょんじょんして思ひ上つた風情でゐたが、その激烈な歡喜は、急速であつた脈搏が静まると同時に消えてしまつた。子供は大人と争ひ、しかもこの少女の如く猛烈な感情を自由自在に働かせた揚句は、その反動で、興が覺

めて悔恨の心を起こすは必然である。ジエーンは、三十分も黙つて考へたまには、自分の所行の狂氣染みてゐたのに心付き、人を憎む我心、我身の上のわびしさをつく／＼感じ、夫人の所へ詫に行かうかとまで思つたのであるが半は経験から、半は本能的に、そういふ仕打は、ます／＼夫人を厭がらせ、従てジエーンの亂れ心をまた／＼激させる事になると考へた。ジエーンは、荒い物の言ひやうを止め、憤怒などいふ恐ろしい情を捨て、心を他に轉ずる術が欲しくなつた。やがて一冊の本をとつて、坐に着いて讀まうとしたが、自分と頁との間に、心の中の妄想が往來して、一向に意味が取れなかつた。ジエーンは、ガラス戸を明けて見た。樹立ちは音もなく、霜は地に充ちて、日も當らなければ風も吹かない。着物の裾を捲つて頭から被ぶり、ジエーンは庭の方へ歩み出した。音もせぬ樹々、落ちる椏の毬果、秋の名残りの赤枯葉の氷り付いたのなどは一向に慰めにならなかつた。

ジエーンは、門に倚つて空漠の野邊を見渡した。羊は一匹も居らず、草は霜にあてられて白くなつて居た。灰色をした日で、雪もよいの曇つた空が萬物の上を被ふて、時々雪が落ちてカチ／＼の徑路や白い牧場に溶けもせずに落ち積もつた。この中に獨り佇立して「如何しやう、如何しやう。」と小聲に囁いてゐるジエーンは、實に哀れな少女であつた。

忽ち澄んだ聲がして、
「ジエーンさん！何處にいらつしやるの。御飯ですよ。」ベシーの聲なのはよく承知して居たが、ジエーンは身動きもしなかつた。ベシーは軽い足音で、小路をやつて來た。

「いけない御子ですね。何故呼ばれたら、直ぐいらつしやらないの。」

ベシーは例によつて少し腹を立てゝゐたのだが、ジエーンが今迄思ひ耽つてゐた思想に比べれば、陽氣な愉快なものであつた。ジエーンは、リード

夫人と言ひ合つて勝つたのであるから、乳母の一時の立腹なんか心にも留めぬ風で、却て乳母の氣輕の氣分に浴しやうとベシーに縋り付きながら

「さあ、ベシー、叱つちや厭だよ。」

その素振りが、いつに似氣なく、怖ぢる風がなく、無邪氣だつたので、ベシーはやゝ機嫌を直して、

「あなたは妙な方ね」と見下しながら、獨りぼつちの風來人で！學校へ御入りになるのでせう。

ジエーンは頷いた。

「ベシーを置いていらつしやるのは、御厭でせう。」

「ベシーは私を可愛がりもしないで、始終叱つてばかり居るくせに。」

「でもあなたが妙に人に怖ぢて、はにかみなさるからですよ。もつと氣を強くなさいましな。」

「もつと打たれるやうにツて?」

「とんでもない!ですが、あなたは全く虐められ

ていらつしやる、それは確ですね。私の母が先日私を尋ねて來ましてね、自分の娘を、あなたのやうな身の上にしたくないツて申しましたよ、さあ、いらツしやい。宜い事を聞かせて上げやうと思つて、御迎に來たのですの。」

「虚言だらう。」

「まあどうしてそんな事を仰るの。何といふ悲しさうな目付をなさるのよ。御聞きなさいませ。奥様も、御嬢さん達も、坊ちやんも、御晝後に御茶に招はれて御出掛けになるのですから、あなたは私と一所に御夕食を召し上ねね。料理番に頼んで御菓子をこしらへて貰ひませう。それからあとで、あなたの抽出しのを片付けますから、手傳つて下さいましな。ちきに、あなたの御荷物に詰めなければならぬですよ。奥さんは、あなたを一日二日の中に此處をば立たせなさる積りなのですから、どの玩具をもつていらつしやりたいか、御自分で御撰りなさい

ませ。」

「ベシーや、私の行く日まで、もう叱らないと約束しなくてはいいや。」

「約束いたしますよ。あなたも大人しくなさらくつては駄目。而して私を恐がつてはいけませんよ。私が思はず叱り付ける時など、吃驚りなさるなよ。あれは眞實ほんとに腹が立つのです。」

「もう御前を恐いなと思はないよ。馴れてゐるもの。之からは又大勢知らない恐い人が出来るのだ。」

「あなた恐がりなされると、人が嫌ひますよ。」

「御前見たやうに？」

「私はあなたを嫌ひではありません。此家こゝでは一番私があなたを可愛いがるでせう。」

「でもそんな風を見せないね。」

「まあ随分御伶俐りせうね。而して御話しなさり方が變りましたが、如何して大膽に平氣に御なりなすつたの。」

「もうちきに御前に別れるのだもの。而してね」

とジエーンはリード夫人との間に起つた事を話さうかと思つたが、考へ直して、打明けぬ事にした。

「而して、私に別れるのが嬉しいからでせう。」

「そうではない。ほんとは、今の處、まあ嫌いやなの。」

「今のところ！まあ厭いやなの！何といふ冷淡な言ひ方でせう。では今接吻して下さいませと申したらまあ止ませうと仰るでせう。」

「いゝえ。よろこんで接吻するよ。もつと御屈ごんみ」

ベシーは身を屈めて、接吻をうけた。やがてジエーンは、すっかり好機嫌になつて、ベシーの後から家内へ入つた。その午後は平和に過ぎた。夜は、ベシーが殊更面白い話をしてきかせ、殊更美しい歌を唱つてくれた。ジエーンの身の上にも、たまには日光の射す事もあつた。

* * * *

一月十九日の朝五時が鳴るか鳴らぬに、ベシーがジエーンの小室へ蠟燭を持って入つて來た。ジ

エーンは、ベシーの來る一時間も以前に、床を離れ、顔を洗つて、床の傍の細窓から差し込む入り方の目の光りで、着物を着たのであつた。ジェーンは、その朝六時に邸の門の前を通る驛馬車で、此處を出る事になつて居た。起き出たのはベシー一人で今彼女は子供部屋に火を焚いて、朝食の支度に取り掛つて居た。子供は旅行の矢先には氣せわしくて、物が食べられぬものであるが、ジェーンもその通りで、ベシーが用意してくれた牛乳とパンをいくら勧められても食べる事が出来なかつたのでベシーはビスケットを紙に包んで旅行囊の中へ入れてくれた。それから外套を着せ帽子を被せてくれて、自分もシヨールを身に纏つて、二人で子供部屋を出た。リード夫人の室の前を通りながら、ベシーは、

「入つて、さよならをしていらつしやいますか。」

「いゝえ。昨夜御前が御夕飯に下りていつてから伯母さんが私の寢てゐるところへ見えて、明日

の朝は私だの子供達を起こすに及ばないよ、而して私は始終おまへの爲を思つて、いろ／＼してゐたのだから、其を有り難く思つて、その積りで私の事を人に御話しなさい」と仰つた。「それであなた何と御返事なすつたの。」

「何もいはなかつた。夜着で顔を隠して、壁の方を向いてしまつた。」

「それは、悪いではありませんか。」

「少しも悪くはない。おまへの御主人は、私の爲を思つてくれはしない。私の敵だよ。」

「そんな事を仰るものではありませんよ。」

「その家に御別れた」と、ジェーンは、廊下から玄關の戸口へ出ながら言つた。

月は沈んで四方眞暗であつた。ベシーの下げてゐる提灯が、石段や小砂利道のすこし霜溶けて濡れてゐるのを照した。寒氣が骨に徹するこの冬の朝を、ジェーンは齒をガタ／＼いはせながら馬車道を急いだ。門番の宿に燈火が見えてゐたが、行

き著いて見ると、門番の妻がやつと火を焚き付けて居るところで、夜前送り出して置いたジェーンの鞆が繩繫がして戸口に置いてあつた。六時には二三分間があつた。其時刻が鳴つて、間もなく、車の音が遠くから響いて、乗合馬車の來るのが知れた。ジェーンは、戸口へ出て、馬車のランプが暗中をいそぎ近づくのを視てゐた。

「此御子さんは、御一人でいらつしやるのですか。」と門番の妻が訊いた。

「えい。」

「どの位あるところですか。」

「五十哩。」

「ずいぶん遠いのですね。奥さんは、そんな遠方へ一人で御やりになつて、御心配でないのですね。」

うか。」

馬車は止まつた。馬が四頭で、馬車の頂邊に御客が乗つて。車掌と馭者は大聲で、いそがせた。車掌が鞆を投げ上げ、ベシーの首に絶り付いてゐるジェーンを引放し馬車の中へ抱き入れやうとした時、ベシーが、

「よく氣を付けて上げて下さいよ」と頼んだ。

「承知〜」と車掌は答へて、戸をボタンと閉め、「よし」といふ掛聲と共に、馬車は動き出した。

ジェーンは、ベシーからも邸からも離れ、知らぬ、遠い、不氣味の土地へ、驅り立てられていつてしまつた。

これからジェーンが學校生活をする段になるのですが大分長くなりましたから一先之で筆を擱きます。

船待ち

—幼き日の追憶の一節—

わかき父

△
たしか初秋の頃と覺えて居ります、母と二人の長い寂しい海の旅でした。

私が六つの時ですから、明治十九年の事でしょう。越後の海府から函館へ歸る途中、莊内の加茂の親類へ四五日泊つて、其處から三吉丸と云ふ小蒸汽船で酒田へ着き、川前の通りと覺えて居りませんが、中西とか云ふ家の二階に、落着かない宿を取りました。

昔の人がよくしたやうに、母と子とが便りなく此の港で船待ちをする爲めです。

△
私どもが來た前日に、新潟から酒田、土崎、函

館と寄港して、小樽へ行く郵船會社の定期船が、寄港して居ましたから、船も大きいし、海も極めて平穩であるし、すぐ翌朝たつて行かれると云ふので、二人で大變に悦びました。

どう云ふ原因であつたか、少しも覺えがありません。あんなに用心深い阿母さんが、つい其大切な船に乗り遅れて了ひました。それから毎日毎日船を待つて、半月餘りも待ちわびて、悲しい日を送らなければならなくなりました。

其時に阿母さんと二人で撮つた色の褪めた寫眞などを便りにして、酒田に滞在した時の光景や氣分を述つて、想ひ出す事の出来る限り、自分の小さい時の姿や心持ちを、今の自分から眺めて見ま

しやう。

▽

乗り遅れた朝の霧のかゝつた川の光景が第一に現れます。白い着物を着て憶病さうに立つて、眉を寄せて沖の方を見つめて居る自分の姿が正面に見えます。又すぐ其傍の少し前の方に、顔を赤くして氣をもんで居る阿母さんが、横向きに成つて動いて居ります。

やがて霧の奥の向うの波の上から、ポーツと云ふ出船の汽笛が軟かに長く響くと、兩脚を投げ出して二階の欄干により懸つた自分の小さい後姿が見えて來ます。最上川から反射して來る湯氣のやうな光が入り込んで、座敷中があたりで一ぱいに成つて、天井と壁にかけて一面に其自分の影法師が大きく眞黒に映り、自分の動く通りに動いて躍るのです。

私は其時、自分の影をなつかしい怪物だと思ひました。

▽

船待ちの日も幾日となく續きました。或日二人で米穀取引所かと覺えて居る建物のあたりを散歩しました。ゆるくうねつた坂に白い洋風の建物と、こんもりした木の繁みとが、快い淡い色で現はれて、長閑な日影がほかくとさして居ります。

併し不思議な事には、人が一人も通りません、又音が何も聞えません。

そして建物と木立とが、次第／＼に小さく成つて退いて行つて、坂が少しづつ歪んで且つ追々に大きく成つて來るのです。

今でも此の光景は少しづつ動いて居ります。

△

或朝、向うの低い暗い家から、何時とはなしに、餅を搗く音が煙のやうに洩れて來て、次第／＼に太い地響を自分の居る二階まで送つてよこします

此日は、雨の降りさうな、陰氣な、遣る瀨ない日でした。小供の心が何物かを求めて止まないや

うな氣分の日でした。

白の重い粘り氣のある音が、大きく幅廣く動いて来て、自分の體を包んで了ふやうで、軟かい、ふく／＼とした、なつかしい味の渴望がどうしても迫つて來ます。長い時間の間、自分は欲しい／＼と云つて阿母さんを困らせました。

▽

古い都のやうな香がして、うす綠色の細いしなやかな雨が、しん／＼と降つて來ます。

室の内は茶色にうす暗くつて、「仕様がな……」と云つたやうな、阿母さんの甘い苦笑ひの顔が、何處かに見えて居ります。

自分は新潟で御土産に貰つた、丸ぐりの表附きの、せいの高い下駄を内輪にはき、身の丈けほどもある長い左の袖を頭から冠つて、嬉しさうに雨の中に立つて居ります。空の暗いわりに足許は不思議に明るく、雨が降つて居ながら、地面は乾いた黄色い色をして居ります。

頭がぬれずに軟かい絲織の着物がぬれて、次第／＼に美しい色が沈んで且つしつとりと硬ばつて來るのが、大變に面白いのでしやう。

土地の風習と阿母さんの好みに従つて、額の生え際を圓く剃りつけ、眉をきれいに拂ひ、頭はふさ／＼したおかつばでした。黄色い翁格子のやうな博多の帯を、胸の上の方にきちんと締め、華やかな淺黄色の廣い附け紐が、帯の下から一面に垂れて、重さうに動いて居る自分の後姿が、はつきり見えて來ます。

焼いた銀杏を誰かに割つて貰つて、中から透き通るやうな綠色の實を取り出して、はにく齧肉でぎし／＼と噛み締めたのも、たしか此の日でした。その故か此の日の雨は、何となく銀杏のやうな感じがします。

▽

船待ちの間は、毎日／＼悲しい日が續きました。どう云ふわけか、其後絶えて汽船が寄港しませ

んでした。それ丈け阿母さんは、先の日に乗り遅れた事を思ひ出しては悔むのでしやう、毎日のやうに、遠い處を見つめては、深い溜め息ばかり洩して居りました。どうかすると不意に自分を抱き締めて、熱い頬ずりをして、遣る瀬ないやうな顔をする事も度々ありました。

其悲しさうなお顔は、今では莊内の紙籬の姿と一緒に成つて了つたやうです——

闇い座敷に、屏風とも襖とも分らない銀色の小さい背景が輝いて、すつと後の方には、かすかな蠟燭の灯が幾つも動いて見えます。じつと見て居るうちに、首をうな垂れた紙籬の形が、少し斜に成つて、其銀屏の前にしよんばりと現はれます。

髪の色や頭の物などはよく分りません。眼の上を少し赤くした青白い瘦せた顔で、眼と眉丈けが悲しみに堪へないやうに、時々動きます。急にこけた肩から下は、更に急に瘦せて居るやうです。たい緑色のやうな着物がほのかに分ります。

やがてぱたりと横に彼方を向いて倒れたやうに成つて、突然、姿が消えて了ひます。

同時に細々とした悲しい歌が聞えて來ます。

▽

長方形に成つて引窓から入つて來る軟かい日影が、妙に斜に歪んで、障子にさして居ります。

馬乘りに阿母さんの膝に抱かれて、御話を聞いて居た自分は、其形が餘り面白いので、一生懸命に見つめて居ります。やがて追々に其日足が下の方に動いて行くのが分つて來ます。

御話がやんで、ひっそりして來ました。

自分がかまつた阿母さんの肩と、自分の乗つた阿母さんの膝と、自分の背中を支へて下すつた阿母さんの手の感じが、活き／＼して居る丈けで、阿母さんの顔も見えません、聲も聞えません。ただ二人とも黒い着物を着て居るのが分ります。

何處かで、だるさうな鶏の聲がします。

淺黄色の濃い雲のやうなものが、すぐ目の前に

ちら付いて、室も障子も阿母さんも、皆んな見えなくなりました。やがて何もかも分らなく成つて了ひました。

眩しい光に眼が勞れたのと、眠く成つた爲めですやう。

▽

いよ／＼定期船が入港したと見えます。

汽船のいやな臭ひと、暗い寒い寂しい海の感じが、限りなく漂うて居ります。

橙色のやうなマントにくるまつた自分は、吸ひ付くやうに阿母さんの膝に抱れて、大勢の船客と一緒に大傳馬の中に混つて居ります。本船へ乗り移り移るには、夕闇の中を川から海へ漕ぎ出して行かなければなりません。此の日は水戸口が非常に荒れて、大傳馬でも中々困難でした。鋼鐵を張りつめたやうな堅い夕空が追々に暗く成つて氣の變り易い人のやうな風が、何方からとなく冷たく吹いて來ます。いよ／＼水戸口まで來たら、餘り

物凄しい海の水と川の水の激動と大音響とにおびえて、阿母さんの膝に小さい頭を伏せました。

こわ／＼下から見上げた時は、巨大な魔物のやうに見えた本船も、阿母さんに抱かれて、舷におろした長い梯子を一つ／＼登つて行くにつれて、追々になつかしく成りました。最後に堅い甲板に降り立つた時には、急に心丈夫になりました。

下につないである大傳馬を甲板から見降したら、今まで自分の乗つて居た舟とは思はれない程に、哀れに見すばらしい感じがしました。

やがて船が動き出したのでしやう。

むく／＼と迫つて來る器械やペンキのいやな臭ひと、船が揺れて大きい器具のぶつ付かる音と、推進器のやかましい響などが、内臓を逆にしぼるやうに自分を苦めます。暗い重いランプの懸つた船室の棚に、自分は阿母さんに抱へられて、死人のやうに青ざめて寝て居ります。

○

透明なうす緑色の波が、チロ／＼チロ／＼と、陽炎でも立つて居るやうに、軽く微動して居る軟かい海の上を、燕尾服を着た人のやうな感じのする汽船が、自分と阿母さん丈けを乗せて、油のやうに滑かにすべつて行くやうです。

自分はきれいに洗い抜いた甲板の細長い板目を間違はないやうに踏んで遊んで居ります。不意に、左の方から、胴と尾とが非常に／＼長い小さい黒猫が飛び出して、一生懸命に何かを追ふのでしや

大阪の童謡 (つらき)

二、動作のつける部

一、芋蟲ころ／＼瓢箪ぼつくりこ

數名躊躇し前の者の肩を持ち歩む

う、閃めくやうにまた見えなくなりました。

やがて太い鏑のある鼻聲で、「小さい！小さい！と自分を呼びかけます。此の聲は遠くから聞える事もあり、又すぐ耳の傍で響く事もあります。其方を見ると、大きい西洋人が、笑ひながらしきりに自分を招いて居ります。何となく恐くつて、うぢ／＼して籐椅子にくつついて居る肩の處から自分を覗き込んで、勵ますやうな眼をして、きまり悪さうに笑つて居る阿母さんの顔もよく分ります

浪花の子守

二、いんにく。にくにく。きんぐにしごろく。ちや。七八のば (合計百となる)

數名手先きを握り親指を内にし差出す。一兒順にこれを押し。

パに當りしもの變ろ。

三、けんけんつばな。けんつばな。ことしの。つ

ばなは。ようできた。いけておくより。つんだ方が。まじや。耳に巻いて。すつぽんぽん耳に巻いて。すつぽんぽん

數名集リマシヤて手拍子を打つ。耳に巻いてにて兩手にて耳に巻く動作スツボンゴンは。手拍子

四、海の……ほら貝

數名海ノ……にて立ちて走りホラ貝にて躊躇ふ。鬼なる兒は走る間に捕へんとて追ふ

五、中の中の小坊さん。なんで脊が低い。親の(この所日)にが抜けしならん(海老)くて。そいで。脊が低い。立つて見やう。すはつてみよ。うしろうに。誰がある。

數兒繫手し一兒圓の中央に目を被ひ躊躇ふ數兒行進しスハツテミヨに至り全兒躊躇ふ中央の兒は己が後口のもの名を云ひ當つ當てらるれば其兒中央に入る

六、蠟燭の。しん巻き巻いても巻いても。まだ巻かん

中心のもの手を擧げ蠟燭の。しんの如くし。全兒繫手し周圍

より巻きつゝ歩む

七、まひまひこんこ。まひまひこんこ。目が。ま

ふたら。やいと(お灸の事)すよ

たい歌ひつゝ廻ひて遊ぶ

八、七夕さん。ほうづき。取つても。だんないか

(構はんかの意)あんまり。取つたら。もつた
い。ない

舊曆七月七日に於て笹に色紙をつけ。これを遊びつゝ歌ふ

九、雪は一升あられば。五合

雪の降る日前掛を(大阪の兒童は大部縞或は。かすりの前掛を男女ともかけ居れり)掲げ雪を受けつゝ歌ふ

十、おんごくなは、や。なは、やおんごく。なは

よいよい。舟が出て行く帆かけて走る茶屋の

亭主が出て招く出てまねく。はりやりや。こ

りやりや。ささよいさ。よいやさ(中略)一お

いて廻はろ。こちや。市ちや立てぬ天満なら

こそ。市たてまする。二おいて廻ろ。こちや

庭掃かす丁稚ならこそ庭掃きまする。三お

いて廻ろ。こちや三味弾かぬ藝者ならこそ。三

味引きます。四おいて廻ろ。こちや皺よらぬ。としよりならこそ。皺よります。五おいて廻ろ。こちや碁は打たぬ。隠居ならこそ。

碁は打ちます。六おいて廻ろ。こちや櫓は槽がぬ船頭ならこそ。槽は槽ぎます。七おいて廻ろ。こちや質置かぬ。貧乏ならこそ。質置きます。八おいて廻ろ。こちや鉢わらぬ。おさん(下女の名)ならこそ。鉢わります。九おいて廻ろ。こちや鍬持たぬ百姓ならこち。鍬持ちます。十おいて廻ろ。こちや地はほらぬ。おごろもちならこそ。地はほります。

こは二十年以前頃盛に船場邊今の東區の一部に流行せしものにして船場遊戯の一つとせり、船場の小娘達所謂(トーサン)が長き袖を後方に廻し後ろのもの其の持ち順に一列或は二列となり、提灯を帶或は背にさし歌ひつゝ町内を歩く(時には綱を用ゆる事あり)されどこれをなす時は夏季にして、涼臺の前を美しく化粧なし歩くを樂しみとなす(現今はあまり見ず)

十一、通れ通れ山伏お通りなあされ山伏

二見門を作り他の一端よりこの門を歌つゝ通る

十二、ちゆうら。取つてくりや。油揚で取つてく

りや

先頭の一見手を擴げ鬼を寄せつけず全見順に後部につき先頭のなすまゝに動く鬼なる兒其後尾を捕へんと左右に隙きを伺ふ

十三、猫よ鼠捕れいたちが笑ふ

全兒撃手行進猫を防ぐ鼠に便にす猫となれる兒鼠を追ひ捕ふればかばる

十四、おんごろもちや(もぐらもちの事)うちにか。どんどごどんの。お見舞ぢや

節分の夜石油籠をたゞき。かく歌ひつゝ町を歩く(かくすれば。農夫。モグラ持チの害少し)と

十五、一がさいた。二がさいた。三がさいた。四

がさいた。五がさいた。六がさいた。七がさいた。蜂がつめつた

一二より順次手を重ね八番目に當りしものは下の手を蜂がつかめつたとてさす

十六、むかでえが。足だした。さう云ふたら。引

込んだ

これも芋虫の如く數兒躊躇し歩み足出シムにて右は左の足を横に出すソ一云フタラより以下になり足を引込むかくて歌ひ

續く

十七、お姫さんのかごと。天神さんのかごと。く

らべて。見れば。おいど（お尻の事）が。ひ

つくり。出ました。なんぼほど。出ました。

瓢箪ほど。出ました瓢箪の先きに。やいとを

すえて。あつや。かなしや。かなばとけー。

けーけーよ。一町目二町目三町目のかごと。

大水ふいて船を浮かして船頭は誰れじやお梅

さん（友の名）じや。ないかいな。深い川へ。

はめよか。浅い川へ。はめよか。とても。は

めよなら。深い川へ。どんぶりこ

二兒兩手を組み籠の如くし一兒を其上に乗せ歌ひつゝ搖る

終りのドンブリコにて下に落す

十六、目もない千鳥お手のなる方へ

こは普通の目隠し鬼

十九、ひに。ふに。だーるまどん。よーるも。ひ

ーるも。赤い頭巾。かぶり通して。だれに當

つても。おこりなへ。當るがいやならおより

なへ

人撰の際。歌ひつゝ順に廻り終りになりしものに當る

二十、紺屋の鼠稻食て羹食て隅んだへ。くちゆ。

くちゆ

一兒手を出し一兒これなたゝき歌ひクニヤクチュニ至り腕

下に手を入る

二十一、（甲兒）猫買を、一貫目で（近頃は二丁目

二丁目と云ふものあり）（乙兒）まだく（甲

兒）二貫目で（乙兒）まだく（甲兒）三貫

目で（乙兒）まだく……………

甲乙向ひ合せとなり乙兒の方に數兒の猫の子となり列をな

す、甲乙右の如く問答し甲兒近より來れば猫の子の頭を一々

押す猫の子は可愛き聲して（ニヤニヤ）と泣く中に甲兒の氣に

入りしを連れ歸り又元の如くし遂に一匹も残らず買へば先の

賣手又買手となりかばる

二十二、大和の大和の源九郎はん。おあそび（一

兒源九郎となり多くの兒は圍はれ隠る甲兒源

九郎の友となり右の如く云ひて誘ふ

(多兒)今寝てます(と答ふ甲兒一度かへり再び來り)又

(甲)大和の大和の源九郎はん。おあそび(多兒)今寝ま。たとんでます(甲兒かへり又來る)

(甲)同歌(多兒)今まゝたべてます(甲兒)何のおかずで(多兒)くちな(蛇の事)の。おかずで(甲)生きたのか。死んだのか。(多兒)生きたのぢや……………

終りの生キタメナチ は。さも恐ろしげなる聲をなし甲兒を追ふ甲兒捕へられ又源九郎となる。(こは戯曲義經千本櫻にある芳野の奥に住みしと傳ふ源九郎狐の一部を表すならん)

二十三、せんぎよせんぎよ。野せんぎよ。ぢや(こは施行施行と云へることなるべし)

大寒中握り飯又は油揚等狐狸の好めるものを竹の皮包となしかく歌ひつゝ提灯をつけ大勢の小供野原に出で包を捨て寒に餌なき狐狸に與へ自家の幸福を祈るなりされど大部は其跡より貧民或は乞食つき來り拾ひ取るなりと

二十四、おいなりさんの。いひつけで。蠟燭一本せんぎよ。く

こは初午の日兒童家毎に至り蠟燭を貰はんとて歌ふものにて乞食的のものなり

二十五、上り目下り目くるつと。まはつて。にやんの目(上りにて)兩手にて己が目を上に(下り目)にて下に。(くるつと)にて目を廻し(にやんの目)にて兩方より寄せ猫の目の如くす

二十六、坊さんが。あつて(にて)〇をかく(この橋こへて)にて一〇をかく(す。かひに(にて)すをかく)もどりが。おそいので。むかひに(にて)むをかく)

二十七、坊さんくどこ。いきやる。(にて)〇をかく(この山こへて)にて一〇をかく(す。かひに(にて)すをかく)

二十八、お寺へ参りませう。下駄札。忘れた。紅葉傘。忘れた。もどりは。こはいな(下略)朝

日新聞—赤新聞

左右に門番あり右を歌ひ朝日新聞赤新聞にて門番のすきを。
伺ひ走り通る捕へらるれば門番となる

二十九、通さん坊通さん坊。どこから通りそな裏
から通りはな（通りそなをついめたるなら

子 供 の 間 食

醫 學 士 石 塚 保 吉

子供の間食については人によつて説を異にして居るやうである。全く無用の長物とけなす人もあれば、是非、子供に必要缺くべからざるものであると主張する人もある。私は、間食必要説に賛成する。なせといへば、子供は、大人と違つて、生きたてゆくとはいふ事の外に、大きくなる、發育するといふ餘分の仕事があつて、

その成長のエネルギーに對して、餘分の食物を要するからである。

ん)

二三人肩組みをなしかく歌ひて歩む横より數兒出で來り其通
らんとし。通さんとし追ひ追はる

餘分の食物を、三度の食事に詰め込まうとする
と、子供の小さな胃袋は、忽ち痛められるから、中
間に適當の時を定めて、不足の食物を補はなけれ
ばならぬ。間食は必要缺くべからざるものである。
しかし、之を與ふるには、適當の制限を要する。
時間も定めず、分量もきめず、種類の選擇もしな
いといふのならば、全く間食は有害至極のもので
ある。

間食を與ふるには、一定の時を定め、食物を撰

博覽會と子供

び、分量も制限せねばならぬ。時間は世間に行はれて居るやうに、午前十時と午後三時とに定めてそれ以外には、決して與へぬやうにするがよい。それを斷行すると、子供の方でも、習慣になつて、他の時間に請求するなどの事なく、間食を最有効に用ふる事が出来る。間食物の種類も大に撰擇しなければならぬ。子供の年齢に應じて斟酌すべきであるが、極小さな子供には、牛乳五勺に食麩二切れ位がよい。

大きな子供には、菓子、芋類などを與へてもよい。餡や豆類はなるべく避けて、ビスケット、煎餅、餡のない麩類を撰んだ方がよい。子供はよくバナナを喜ぶものであるが、此果物は腸をこわしややすい。新らしい青々としたのは少し位差支ないが舊くなつたのは、微菌養成に最ふさはしい状態にあるから、必ず之を避けるがよい。分量は年齢にしたがつて（勿論その身體の強弱にも注意すべきであるが）適度に増加してゆくがよい。

博覽會場内に多くの飲食店が開かれるであらうが今日までの經驗によると、この種の場所に於ける飲食物は、とかく病氣の原因になりやすい。其理由は、正月や、祭日に食傷するやうに、分量を過すといふ事もあらうが、店の不注意にやる事が多い。かゝる場所では、店の考が違つて来る、自分の店では信用を重んじて、品物に注意するが、こゝでは相手が違ふので

何でもよいから量を多く賣捌かうとする。量が多いから、しらすく製法が粗雑になり、取扱ひが亂暴になる、従つて、微菌がはいつたり、品物がわるくなる機会が多い、それを飲食して病人が出来る。無理のない話である。

故に、博覽會は見物だけに止めて、飲食のことはたとひ子供が請求しても、よく之を説諭して、なるべく會場をはなれた、信用のある店で用を便

じるがよい。

子供の博覽會見物は、幾度にもさせるがよい。幾千の珍らしい物品が、陳列せられてあるから、之を一度に見せるといふのは、子供の頭の爲めに甚だよろしくない。そんな事をするとき一時に強烈な刺戟を受けますので、ボンヤリしてしまつて、歸

つて「何を見たか」ときかれても、一向何にも覚えて居ないといふやうな事になる。加之、往々、之が爲めに安眠が出来ないといふやうな結果になる。故に、面倒でも、子供には、必ず一度に一部分づゝを見せる事にするがよい。教育上にも、それが有効であらうと思ふ。

躰方の準的 (二)

(神戸市教育會に於ける講習の一節)

文學士 檜崎淺太郎

五、明治の教育に於ける徳

育の消長

前にも申し上げました様に明治以前の教育の主眼は意志の鍛練と云ふ一點に置かれたのであつたが、明治の教育になつてから暫時の間は智力の教育に全力が注がれた。日本の文化は歐米の文明に

比べたら到底足元にも寄られ無いから何よりも先に國民一般の智力を高めるのが最急務と考へられて居た。かく考へて上下擧つて智育を主とした爲め勢ひ徳育の方は怠り勝ちになつた。かゝる状態の教育を明治十年頃まで行ふて見た。ところが智育に偏した過去十年の教育的經驗は識者をして其欠陥を認知せしめる様になり、維新以前までに涵

養せられて来た忠君愛國禮義仁愛などの道徳上の美はしい徳性が少しく薄らぎかけたと見らる可き兆候が社會に現はるゝ様になつて来た。そこでこれでは大變であると社會の先覺者が先づ憂を抱いて遂に自ら立て、日本固有の道徳の保持に力を盡す様になつた。西村茂樹先生は其首領でありました。先生は明治九年から東京修身社を起して青年の徳育遂行の機關とせられ鋭意徳教に奮身し終に明治十九年に至りましては東京大學で學生全般に日本道徳論を講せられた、先生は其講義を開始するに當り次の如き告白をせられて居る。「今日より引續きて爲す處の演説は余が日本全國の爲め、日本國民各人のためと思ひ込みて滿身の力を盡して講述する所なれば願くば聽衆諸君は一場の閑言語と看做すことなく聽聞あらんことを望む若し余が演舌する所道理に合へりと思はゞ願くば同心協力して斯道を國中に擴めんことを務め、疑はしき條件あらば十分に質問あらんことを……」之れによ

りて見るも當時の識者が如何に智育偏重の教育の結果を恐れ人心の逆流を停止せんと勉められたかを知ることが出来る。かゝる工合で徳育のゆるかせにしてならぬことが稍分る様になり明治十五年以後は學校の教育でも徳育を重ずる様になり品行を注意し小學校では品行通知表を作りて毎日學校と父兄が兒童の品行を互に通知し合ふて矯正善導する様になり、其時の故森文部大臣も全力を茲に注がれた。續いて二十三年には徳育の目標とすべき教育勅語が下賜せられて進む可き道が明となつた。其以後は文部の當局者の方なり實際教育家が非常に苦心と工夫をせられて勅語の御趣旨の貫徹に力を注ぎて今日までに至つた。斯の如き次第で明治二十年以後の教育を形式的に見れば餘程徳育に骨を折られた様であつたが併し豫定の結果を充分に收めることが出来たものではなかつたかの感がある。それには色々な原因もあるが徳育の研究が不充分であり、方法が其要を得て居なかつた

ことも其原因の一ではあるが併しこの外に他に色々な有力な原因がある今其一二を擧げて見ると。

六、現今に於ける國民道德

の動搖と其原因

我國民は日清戦争日露戦争によりて兵士の精神が昔の武士とは段々變りつゝあることを知つた。即ち上官の命令でも危き所へは進むことを躊躇する様になり忠君愛國の念が漸次衰へ利己的傾向が著しく増進した來た。何故に此忠君愛國の精神がうすくなつたかと云ふに

其一は義務教育、中等教育、高等教育普及の必然的結果である殊に高等教育を受けたものが増すと色々物事を考へて見るそして考へた結果は言語に表し議論をする。世の中に議論が多くなり各種の意見が發表せられる。其意見の多くは自己の利害得失を根據として立論せられる。加ふるに、西洋から輸入せられた自由主義、民主主義、個人主義、

享樂主義、自然主義等の思想が直接若くば間接に利己的傾向を助長して一層其傾向を強勢し極端にまで走らせる。そして遂には「忠君愛國は何の爲めであるかと」と疑ひ「何故に各個人は國家の犠牲にならなければならぬか」と個人主義の見地から論を進める。そして自分の考へたところがそれが社會にどんな影響を與へるかどうかは深く考慮せずして無遠慮に新聞雜誌に公表する。よし公表しなくとも日常の談話の間に其思想が洩れる。之を聞くものゝ内で話したものと同様の考を持って居つた者は一人の味方を得て自信を強める、其思想がいよゝゝ生命を増して來る。之を聞いた多くの民衆は自ら思考する力は無い。随つて自己の意見は持たぬ頭は空虚である併し聽けば理解するだけの力は教育に依つて養はれて居る。そこで理解して成程あの人の云ふさにも一應の道理があると自らうなづく、不知不識其思想が民衆の胸裡に移植せられ漸次に培養を受けて遂に民衆の思想の變化

が起り所謂國民思想の動搖が始まる、國民思想の動搖は種々なる方向に向けられる。それが國家に對すれば從來の國家に懷疑思想を抱かぬとも限らぬ。殊に社會國家から相當に愛護せられない不平等家が之に陥る、不平等家なくとも時に思考して見る。そして遂には日本の國家存立の絶対必用に就きてすら疑をさしはさむと云ふ恐ろしむの結果となる。事茲に至れば危険思想中の最も危険なる調を帯びて来る。以上は我國民思想の動搖が現れて來た徑路の一端を尋ね、夫が國家に對しては如何なる結論を導くかを述べたが此の考が社會に向けられ、家庭に向けられ或は日常の生活に向けられる時は其處に亦新しき社會觀、家庭觀が生ずる。政治に向けられれば新しき政治觀が生ずる。たとへる面にはどんな理由が潜んで居るか知らぬが表から見れば昨年以來の諸種の政論中には著しく新しい政治觀が発見せられる、其中には随分舊思想の人を變遷せしむる様な事實も無いでも無い、そして多

くの民衆は却つて之を歡迎して居る。勿論其内には非常に正しき進歩があるとも疑ふ餘地は無い、併し余は茲に是等の思想中に含まれて居る要素を分折しようとするのではなくして唯國民的意識が非常に動搖し易い状態になりて居ることを指摘したい。そして之は國民思想に確固たる標準の欠損して居るためであるが、それが引いて國民の意志の力を弱くし堅忍持久の力を甚だ薄弱ならしめる所以を御理解を願ひたい。

意志の薄弱は質朴堅實の徳を失ひ奢侈浮薄の風潮を盛ならしめる、今日の社會の色彩は浮薄と云ふ一語で飾られて居る。之れは實業界にも政治界にも將た又堅實を以て特徴とす可き宗教界教育界も其色を帯び學生間にも召使の間にも丁稚仲間にも之れが認められる。新しき文明の起り人心が現在及び將來にのみ向ひ歴史を忘れ昔を思はぬ人々の思想には多少浮薄の傾向はあるのが原則だがそれが今日は極端に進んで居る。殊に憂ふ可きは將

來の國家を形成す可き青年に此の風潮の感染して居ることである。今日の學生間の談話を數分間聞きて居ると其内には「いやだ」「かなはん」「うるさい」「悲觀した」「よせく」などの語を直に發見する、かゝる語は意志の薄弱な浮薄の氣に充たされて居る表徴である

昔の畫生は一度師と仰いだ先生ならば其の先生の流義を一目散に手に入れんとをつとめ十年も廿年も専ら先生の繪の模倣につとめた。其つとむること長きに從ふて自ら其人の個性が發揮して新なる一家を爲す可き特徴が生じて大家となつた。今日の學生は美術學校に入り數年學べば直に先生を批評し妙な畫を畫き獨りで大家になりすまし根氣よく勉強する者が尠い。教育界にても亦然りだ。次へ次へと移り浮薄に傾くの嫌がある即ちモンテッソーリでなければ一時も夜も明けなかつた京、阪神の保育界が各所の講習を手引きにしても今日モンテッソーリの保育を實際に本當に研究せられて

居る所が何處にあるでせうか、かゝる有様では保育界の研究的良心はまだく薄弱と云はざるを得ないと思ふ。唯態度だけで云ふと自分の往く可き道を深く信じて靜かに進んで居られるフレベールの心醉の保育家をなつかしく又心嬉しく思ふ（之等の方面にも缺點はあるがよき點をのべて云ふ）

かく云ふのも實は京阪神の保育界の將來に大なる光明と希望を持つて居るからである。先に研究的良心が甚だ薄弱であると云ふたが之は諸君を激勵したきの苦言である。實を云へば私の如く研究其者を以て生命として居る者が懺悔に堪へ無い程諸氏は研究に夢中である日々相當の保育其者の仕業のある上に。各種の講習を開き調査を行ひ相談會を設け時々各地方の保育を視察し斯道の大家に意見を求め鋭意改良を謀りて居らるゝ處は恐く全國に其比が無いのみでなく世界にも多くはあるまい。私はよくあれ程出來ると感心する許りである。是等は斯道の先輩が其道を開き熱心に誘導せられ

た處に深き根據があるのでしようが他方實際に従事せられて居つた保母諸君の内心に長き間何者かの欠陥を感じ強く深くあるものを求めて居られた結果と云はねばならぬ。斯る氣運に向ひて居る關西の保育界は前途甚だ多望であるが多望であると共に大に警戒を要し世の風潮に捲き込まれてはならぬ、どうかすると捲き込まれ易い傾向もある

例へば私方は放任主義である。私方は活動主義でやつて居る。私方は自由活動を重すと。然らば自由活動とは如何にするのであるかと少しく底強き反問があると我ながら明白に答ふるに苦しむ。昔の眞の教育家は自己の修養がありて教育に従て居た今の教育家は職業として教育に従事して居るのでどうも根柢が浮薄である。私は新進氣鋭の教育家又は保育家の人たちの間に自由とか活動とか云ふ類の言葉や感想が時々談話の間に繰り返へされるを聽いて居る、かくの如き語を年若き青年教育家又は保母の方々が相互にはなされて居るのをき

いて深き興味を感じかくの如き人の手を待つて始めて保育の事業廣義の教育が改善せられ進歩するのであらうと力強き感を懷き新しさ針路はこの人達によりて切り開かれ行くのであらうとの感に打たれるが又暫くすると續いて多少の疑懼と不安の念が生ずる。其不安は彼の人たちは果して此新生面をきり開いて行くに足る充分な準備と精神と意氣とを有して居らるゝのであらうか。假に精神と意氣ありとするもどれだけの準備があるかと思ふと其際多少のおぼつかなさを感じる。一種の浮薄と云ふ色が無いとも云へない、かくみれば教育界にも浮薄の分子が流れ込んで居る。

七、善良にして強力なる

意志教育の必要

斯の如く一方には人心が浮薄に流れ奢侈に耽ると共に人々の欲望は享樂的現世的になり他方には忠君愛國の念漸次衰へ個人主義増長すれば國家の

存立は不可能となる。然るに今日世界の人種的競争は日一日と激烈を極めて居る表面平和を装ふて密に犬牙を磨きて居る。一方に平和會議の行はれて居るかと思ふと他方にありては偉大なるドレノート大艦が製造せられて居る。かゝる間に立ちて日本の國家の存立を保ち日本人種の權威を發揮して行くにはどうしても先づ國家として立派に存立せしめなければならぬ。國家なき人種が如何に悲境におち入りて居るかは露國に住する猶太人を見ればよく分る。彼等は公立の學校に自由に入學出來ず職業を自由に選ぶことが出來ず又自由に旅行が出來ないかゝるが故に個人權利を保證する爲にも國家の存立を必須の要件とする而して國家を存立せしむるためには個人の利益と權利などは一時犠牲にしても其の存立のために戦はなければならぬ今日世界の列國中一人で日本人のみ異人種で他の英米獨佛伊露等は皆同一人種で且基督敎國である同一の利害關係の時は先づ向ふは合同しやすい。

かゝる列國の間にありて而も我國の經濟狀態は外債二十幾億ある之に市町村の負債を加ふれば非常なものである而して他の列強に比すれば天産物も貧弱の方である、かゝる難局眞に國家危急存亡の秋に當りこの難關を切りぬけるのは國民の善良なる意志の力に待たざるを得ない之を外にして他に道がない。

曾て東京の倉橋文學士が神戸に於ける京坂神聯合保育會で幼兒保育の新目標なる題目の下に有益なる講演をせられ實行、奮闘、精勵の生活を爲し總べての艱難に打克つて疲れず携まず自己の所信と使命とを實行して行くことの出來る處の強き彈力性のある神經系統の發達を謀り之を保護するのが保育の新しき目標でなければならぬと教へられたことは今猶諸君の耳に新なることと思ひますが何人が考へても、同じ結論に達する。而して倉橋氏は強き意志の養成の手段或は基礎として生理的に神經系統の保護及び養成を極言せられて居る、

之れは生理的に見れば神經系統の發達保護心理的。に云はゞ善良にして強力然も持久性を有する意志の涵養である而して之れは實に教育の力で養はなければならぬ。かく考へて來ますと純粹の教育學の學說からみるも我國の現狀より見るも意志の鍛練と云ふことが訓練の最大目標とみてよい、之れだけ申上ますと意志鍛練の重要なる所以につきての御自信は充分出來たと思ふが、この思想に千金の重を與へんために意志教育の大鼓吹者然も國勢挽回の爲に意志教育の必要新教育の理想を鼓吹したる而して獨逸國今日の興隆の源を開きたる「フヒテ」の意見を皆様にご紹介せざるを得ないのであります。

回顧致しますれば今日より約百七年の昔千八百六年は獨逸プロイセン國の忘るべからざる時でありました。普國軍はイーナ及アウエルスタットに於てナポレオン軍に破られライン、エルベ兩河の沃野の大半を佛に割讓し兵力僅かに數萬となり伯

林は佛軍の占領する處となり國今や滅びんとし民力將さに盡きんとするの悲境に陥ち入つた此時フヒテは、エルランゲンの大學で講義をして居つたが急に其講演を停止し急ぎ伯林に歸り率先して普國及全獨逸國民の元氣の回復を努め一身の危険を顧りみず敵軍占領中の地に在つて「獨逸國々民に告ぐ」と云ふ大演舌を試みた。其演舌は獨逸の人心を刺戟し國民の自尊心を進め佛國より受けたる屈辱の狀態を脱せんとする傾向を起した今其演舌の梗概を話すと次の通りです。

諸君之れはフヒテが獨逸の國民に告げたのが今日の日本は實に其當時の獨逸の狀態に似たものがある今の我國の狀態を心に持ちておききになれば恐らくは木石の如き人と云へども心を動かし心あるものは感憤する處なくてはならぬと思ふのであります。演舌の主旨は國民の道德的及學術的敎育により衰弱の極端に達したる國勢の挽回を企てんと欲する處にあります。

『今日の獨逸國民は常に利己的状態に陥りたるのみならず外國の威力の下に屈從したるが爲に遂一利己心の獨立すら之を失ふに至つた、かくの如き國民は如何にして之を救濟すべきか他よりの補助神力及び其他一切の事は國民を此の状態より救ふに足らず。若し何か之を救はるる者ありとせばそれは唯其自力に依るの外は無い。而して自力を養ふ唯一の方便は從來の教育法を全く新にし以て國民生活を一新するにある。新教育は個人意志の我儘なる自由を全然破壊し之に代ふる必然的理想の意志を養成するを以て主眼となせ。從來の教育に於ては恐怖及希望快樂の如き自己の愛を以て意志の動機たらしめたるは甚だ不當である。善其者の愛を唯一の動機たらしめねばならぬ。而して善其者を悦ばしむるは單に之につきて談り徒に記憶及び想像を勞せしむる如き方法の能くする所に非ずして生徒の自發的活動に依らなければならぬ又眞の陶冶の目的を警戒し理想の命令に従ひ全體のため

には多く自ら抑制す可きを悟り此の抑制が社會的生活秩序の生活の要求上眞に必要なことを理解せしむるが大切である。教育者は止むを得ざる時は罰を用ひて其秩序の精神の發生を強迫しても宜し。之れは意志陶冶の消極的方法なるが更に積極的には全體の爲めに働くことある規定を設くるがよい即ち全體のために相協同して働き報酬及賞與を求むることなくして全體のために盡すことを快とするに至らしむ可きなり

新教育の最後の務めは人をして眞の宗教的生活に入らしむる點である。而して宗教は徒に未來を望み現世を夢まぼろしの經過的のものに不動の分子を植ゑ天國を此の世に發見し建設し現世の事業の上に永久繼續するものを注入す可きである。純潔なる人が其事業の永久不滅ならんとを求め且之を信じ得るは外觀消滅的のものに不滅の分子を承認し得るがためである。吾人が一身を捧げて國に盡し社會に盡し事業に盡すは實に此の永久不滅の

分子の存在を信向するがためである生活は單に變化する實在の繼續としては何等の價値はなし、行水に數書く如き水泡の如きものならば實に無意義のものである。ところが俗人が無意義と思ふものもよく考へれば永久不滅の意義ある而して國民の獨立的繼續がこの事業の生命を不朽ならしむる故に國民國家の獨立的繼續のためには死をすら欲せざるを得ない。個人死すとも國民生活すれば其個人は猶眞によく生活することが出来る。

新教育の則とするに足るはペスタロツチの教育法である氏の教育が直觀と自己活動に重きを置きたること及び身體練習に深く注意せられたとは實に達見であつて少年は各武器を取つて其國の爲めに戦ひ得る體力を持たなければならぬ。教授及認知の眞の根據は感覺である尙新教育に於て要求す可き一の主要なる事項があるそれは學習と作業とを結合することであつて生徒は少くとも其教育所を各自の共同的自力によりて維持せらるゝものと

して見各自其目的に對して力を盡すとの意義を有せんを必要とする。此の事は教育事業其者の要求する所のみでなく共同の國民教育を通過するもの、多くは作業者の地位に立つが故に其準備的練習を行はしむる點よりみて重要である。學校は學者のみ養成す可きものにあらず。又他人の助を要せず自力により世に處し得るとの自信は人格の獨立及び道德の條件なり。深く注意するを要すと論じ更に手技の教育に就き意見を述べて曰ふには刺繡及び紡績の如き技を課するは敢て不可とは云はないが然し主要の作業は耕作園藝牧畜及び學校團體に益ある手技でなくてはならぬ。』

以上はフイヒテの演説の梗概に過ぎぬが併し其内には意志の教育、自發活動、宗教的教育、學習と作業の結合等今日の教育の理想として居る處を明示して居る。一日の保育の業を終り深夜熟讀其精神を了得せらるゝならば恐くは實際の保育に根本的の革新を加へなければならぬとの御發心が起

るであらうと深く信じます。私は只今意志教育の

鼓吹者として遠く獨逸に其人を求めましたが道は近きにありて我國にありても其人は少くないのであります。殊に故森文部大臣は思想混亂の時代に當り文教の宰相となり國民思想の確立と統一に全力を注ぎ志氣雄壯なる國民を養成せしが爲に體育を尊重し獎勵せられた。氏は曾て九州巡廻の時意志の教育體育を専らとする熊本の濟々疊に立寄り其學校を見て其主義を賞賛せられて、凡そ學校なる者は斯の如くなければならぬ。智育に於ては進んで居らぬが其目的は教育の第一主義を得て居る即ち學校の模範ともなるべきものであると云ふて歸京の後先帝陛下に奏聞せられたと云ふことである。森氏が教育の第一精神、根本義につきては深く考察し善良なる意志の鍛鍊國民志氣の練養陶成に如何に苦心せられ如何なる見解を有して居られたかは氏が奉られた教育意見書に見ることが出来る。今之を朗讀して見ますと次の通りである其文

章亦風誦するの價值がある。

『有禮職を文部に奉し。爾來

聖明改良の盛旨を奉體し。教育の方法規則。既に粗々端緒に就くことを得たり。竊かに惟みるに百般の事。先づ準的を定むるを要す。準的一たび定まるときは以て年を期して非常の業を成就することを得べく又以て永久に舉行して頽廢に至らざることを得べし。今夫國の品位をして進んで列國の際に對立し以て永遠の偉業を固くせんと欲せば。國民の志氣を培養發達するを以て其根本と爲さざることを得ず。是乃ち教育一定の準的に非ず乎今は文明の風囂々として行はれ。日用百般の事物漸く變遷し進む然るに我國民の志氣果して能く練養陶成するありて難きに堪へ苦を忍び前途永遠の重任を負擔すに足れる乎。二十年の進歩は果して眞確精醇深く人心に涵漸し以て立國の基を鞏固ならしむるに足る乎加ふるに我國中古以來文武の業に従ひ躬國事

に任ずるは偏に士族の専有する所たり。而して今に至り開進の運動を主持する者僅に國民の一部分に止まり。其他多數の人民は或は茫然として立國の何たるを解せざる者多し。顧みるに歐米の人民上下となく男女となく一國の國民は各々一國を愛するの精神を存し固結して解くべからず。以て能く大難を冒し大危を忍んで其立國を爭奪の間に維持する者は多くは其教化素ありて以て品性を陶養するの力に由らずんばあらず有禮不肖思念して此に至る毎に三嘆痛息して措く所を知らざるなり。蓋教育の規則粗々備はるも教育の準的は果して何等の方法を以て之を成遂することを得べき乎顧みるに我國萬世一王。天地と與に限極なく上古以來威武の輝く所。未だ曾て一たびも外國の屈辱を受けたることあらず。而して人民護國の精神。忠武恭順の風は亦祖宗以來の漸磨の陶冶する所。未だ地に墮るに至らず。是即ち一國富強の基を成すが爲に無二

の資本。至大の寶源にして以て人民の品性を進め教育の準的を達するに於て他に求むることを假らざるべきものなり。蓋國民をして忠君愛國の氣に篤く品性堅定。志操純一にして人々怯弱を耻ぢ屈辱を惡むことを知り。深く骨髓に入らしめば精神の嚮ふ所萬派一注以て久しきに耐ゆべく以て難きを忍ぶべく以て協力志同して事業を興すべし督責を待たずして學を力め智を研き一國の文明を進むる者此氣力なり生産に勞動して富源を開發する者此氣力なり凡そ萬般の障礙を免除して國運の進歩を迅速ならしむる者。總て此氣力に倚らざるはなし長者は此氣力を以て之を幼者に授け父祖は此氣力を以て之を子孫に傳へ。人々相承け。家々相化し一國の氣風一定して永久動すべからざるに至ては國本強固ならざるを欲すれども得べからざるべし。若或は之に反し教育の及ぶ所其本を遺して其末に止まり人民の志操一定の方嚮を取らざるときは風俗腐

敗し信義地に墮ち浮薄卑屈情弱の氣隨て之に乗じ將來國家の運命實に未だ如何と云ふことを知らざるなり。願くは今に及んで全國の男子十七歳より二十七歳に至る迄其學に就かざる者とを問はず總て皆護國の精神を養ふの方法に従はしめ文部省は簡單平易なる教課書を敷き人々の諷誦又は講義に便ならしめ陸軍省は體操練兵の初步を教へ毎戸長又は毎郡の管掌する所とし一日に一度或は二度時間を限り其區域内の人民を學校に集め聽講又は運動に従來せしめば庶幾くは忠君愛國の意を全國に普及せしめ一般教育の準的を達し最下等の人民に迄要する所の品位を一定ならしめ國家の全部を舉げ奴隸卑屈の氣を驅除して遺す處なからしめ而して國本を鞏固にし國勢を維持するに於て裨補する所多からん有禮職掌の及ぶ所に於ては既に師範學校の生徒に操練を授けたり將來公私の學校に於て事宜の許す限りは益々此法を行はんとす是有禮の教育主義

の大本なり。」

以上は德育の準的につきて大概を御話致しました此準的を現實する處の方法につきて、感情意志の講義を終り更に改めて御話をして見たいと思ふのであります今日は之れで終ります。

○フレイベル誕生日

本月二十一日はフレイベルの誕生日にあたります。本會は此の日を紀念するために、同日午後三時より女子高等師範學校附屬幼稚園に於て、フレイベル紀念會を開き、東京高等師範學校教授乙竹岩造氏のフレイベルに関する有益なる御講演を願ひます。是非多數の方々の御來會を得て、楽しく有益に、此の日を記憶したいと思ひます。常會の通り會員外の方々も御隨意御來聽下さりまし。

○東京市保育研究會發會式

今回東京市視學諸氏、小學校長諸氏の唱導により『東京市保育研究會』新たに設けられ、二月廿八日其の發會式を擧げられた。其の規則は左の通りであるが、之れ實に東京市幼稚園教育界にとつて最も慶賀すべきことであつて、之れより東京市に於ける幼稚園教育の進歩改善必ず期すべきものであるを信ずるのである。全國主要なる府縣市に保育會の設立あるもの尠からず尙續々増加せんとせる時に際して、東京市にも亦此の會あるは、最も時宜に適したる、而して必要缺くべからざる擧といふべきである。吾人は滿腔の喜びを以て此の會の將來を祝し度いと思ふのである。

東京市保育研究會規則

- 第一條 本會ハ幼稚園ニ於ケル幼兒保育ニ關スル事項ヲ研究スルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ヲ東京市保育研究會ト稱ス
- 第三條 本會ハ事務所ヲ東京市教育研究所ニ置ク
- 第四條 本會ハ市内幼稚園保姆ヲ以テ組織ス
- 第五條 本會ノ役員ハ左ノ如シ
會長 一名 幹事 五名
- 第六條 會長ハ本會ヲ代表シ本會一切ノ事務ヲ總理ス
- 第七條 幹事ハ會長ノ指揮ヲ受ケテ會務ヲ處理ス
- 第八條 本會ハ重要ナル事項ヲ審議セシムル爲メ評議員若干名ヲ置ク
- 第九條 會長ハ會員之レヲ推薦シ幹事及評議員ハ會長之レヲ委囑シ其任期ヲ各二ケ年トス

第十條 會長ハ必要ニ依リ委員ヲ置キ會務調査事項ヲ分掌セシムルコトヲ得

第十一條 本會ノ事業ノ概要左ノ如シ
一、講習 二、講演 三、研究調査等

第十二條 本會ノ集會左ノ如シ
一、例會 毎年三回
二、總會 毎年一回

但必要アルトキハ臨時會ヲ開クコトアルベシ

第十三條 會員ハ會費トシテ毎年金六十錢ヲ三回ニ分納スルモノトス

第十四條 本會ノ規則ハ總會ノ決議ヲ經ルニアラザレバ之ニテ變更スルコトヲ得ズ

○東京市教育會主催幼稚園教育講習會

前項東京市保育研究會の設立によつて、東京市の保育界は大いに活氣を呈し來つた時に當つて、東京市教育會の主催によつて幼稚園教育の講習會が開かれたことは、實に機を得たるものといふべきである。講習會は三月五日より同十日に至る六日間麹町小學校を會場として毎日三時間づゝ開かれ、左の諸問題に就て夫々講習せられたのであつて、出席聽講者東京市内及び附近の幼稚園保姆諸君の殆んど全部及び小學校教員中の特志諸君を加へて、非常なる盛會であつた。東京市教育會が特に我が幼稚園教育問題の爲めに、此の講習會を開催されたことは、斯界のために深く謝すべきことと思ふのである。

- (1) 幼兒取扱の實際 東京女子高等師範學校教授兼幼稚園主事 安井哲子君
- (2) 幼稚園教育の諸問題 東京女子高等師範學校講師文學士 倉橋惣三君
- (3) 黑板畫 東京市小川尋常小學校長 松田 茂君

フレীবベル自傳

(第四回)

(マイニンゲン太公に宛てたる書翰)

倉橋惣三譯

二十八、エナ 大學入學

斯くて私を殊に最近の私を温味を以て喜ばせてくれた光明や日光はまた失はれて了ひました。思ふまゝに羽搏きをしやうとした私の心の翼は再び窘められ而して私の生活はまた冷たく不快なものとなつて了ひました。

その頃父はエナで醫學を研究してゐる私の兄(ツラウゴット)にお金を届ける必要がありました。この事はもう差し迫つてゐたのです。そこで私は他に何も用事がなかつたので使ひにゆくことになりました。

私エナに行つた時私は其地の目覺しい智的生

活に心を奪はれて了ひました。而して私は暫時其地に止りたいと望みました。

一七九九年の夏期半年の學期の八週間がまだ残つて居りました。私の兄は父の許へ手紙を送つて私がエナで有益に又有効に時を過すことが出来るから、その手紙を以て私がエナに止ることを許されるやうに願つてくれました。

私は地圖と設計圖の研究をしました。而してすべての時間をその研究に費しました。

聖ミケル祭には私は兄と共に歸省しました。而して私の繼母は私が今では大學を卒業して來たと充分に言ひ得るといふことを認めました。しかし

私はさうは思ひませんでした。私の明智と私の心
靈とはいろ／＼に刺戟されて居りました。而して
私は父にエナで財政學を研究して以前の生活に歸
りたいと願ひました。父は私が學費を出せるなら
喜んで許可してくれるのです。私は母から貰つた
ホンの少しばかりのお金を持つて居りました。け
れども私はそれでは不充分だと思ひました。

私は兄と相談した後父にもその事を話しました
私はまだ一人前になつてゐませんので、自分の財
産を實際に役立てる場合には、保管人の同意を得
なければなりません。けれども私はお金が
手に入るや否や學生になつてエナに行きました。
一七九九年のことです、私はその時十七年と六ヶ
月でありました。

課程に對する私の資格を證明した父の證明書
は私をして難無く入學せしめました。私の在學證
書には私は哲學科生となつて居りました。私には
これが甚だ異様に思はれました。何故ならば、私

は私の研究の對象として實際的の智識を望んでゐ
たからであります。而してそれまで度々耳にした
ことのある哲學といふものに對しては私は非常に
高尙なものであるといふ考を懷いて居りました。

哲學といふ言葉は私の空想的な動き易い受容的
な性質の上に大なる感化を與へました。尤もその
感化といふのは認識されるが早いか消えてなくな
つて行つたのでありますが、而かも尙それは私の
修業に高級な而して思ひ設けぬ關係を持つて居り
ました。

私が聞いた講義は今や再び私が抱懷するに至つ
た性格に於て必ず役立つであらうと思はれるもの
ばかりでありました。

私は應用數學、算術、代數、幾何、礦物學、植
物學、生理學、物理學、化學、報告、森林樹木の
栽培及び森林管理法、建築術、造家術、陸地測量
法の講義を聞きました。

私は地形を現す繪畫を引續いて描いて居りまし

た。

私は數學の他に純理論的のものは何も聞きませ
んでした、而して物理學の授業と思考に就ては
私はそれと共に持ち來された大學生活の交際位し
か學びませんでした。けれども多くの方面に於て
多くの智的衝動を受けたのは確かにこの交際を通
じてあります。私は何時も教へられたことを會
得しました。そして以前の生活のお蔭で私が根本
的の主題に馴れて來るにつれて益々よく了解する
ことが出來るやうになりました。而して私は既に
それらの智識と實際的との仕事の關係を知りまし
た。

二十九、いろいろの學課

講義のあるものは私にとつては殆んど容易であ
りました——例へば數學の講義などであります。
私は何時も容易に且つ愉快に幾何學と數學と平面
との關係を認知することが出來ました、それです
から私にはすべての農夫がそれらの關係を私と同

じ様に理解し得ないといふことが分りました。こ
の事を嘗つて私が兄に話しますと兄は私に説明を
興へてくれやうと試みました。けれども私は尙そ
の事由を會得することが出來ませんでした。

私は自分でもはつきりと分つてゐない、或物を
得たいと思つてゐました。けれども以前に知つて
ゐたことよりはもつと高尚なもつと重味のある或
物を望んでゐたことは確です。何でも於^{よりおほ}多くの生
命のある或物を豫期してゐたらしいのです。數學
の課程はそれ故最初は必要がないやうに私には思
はれました。けれども後になつて私も種々精しい
ことは了解することが出來なかつたのであるとい
ふことに氣が附きました。とはいへ私はこれをあ
まり重要視しませんでした。何故ならば私は既に
その大意を知つて居りましたそれに私は若し特殊
な場合に就て學ぶ必要が生じたとしてもそれを解
き去るに少しも頭をなやまさなくともよからうと
密かに思つたからであります。

優良なる教師の講義も私にはさまで有益ではありませんでした。若し私がこの授業の科目や過程の中にもつと離るべからざる関係のある而して勝手な取極めの妙い或物を捉へ得たならばさうではなかつたかもしれませぬ。

この離るべからざる関係の缺乏といふことが常に私がどの學科を選んでも直き嫌ひになつてしまふ原因でありました。私は純正數學に於てすらもこの缺乏を感じました、應用數學に於ては尙更さうでした、實驗物理學に於ては一番この減が強うございました。

エナではすべてこのものが勝手な系統組織に排斥されてゐるやうに私には思はれました。それですから極く最初から私はこの研究を煩はしいものであると思ひました、實驗は私の注意を惹くに足りませんでした。

私はある簡單な基本原理によつて説明せられ誘致せらるゝ諸現象の内在關係を探したいと望んで

居りました。けれども斯ることはすこしも私には居り與へられませんでした。

數學的の證明は紙鷲の糸に付けて飛ばす紙片のやうなものでした。その證明は證明せらるべき真理が前から既に生々とした力を以つて私の前に横つてゐる場合に於てのみ私の心眼にはつきりと映じて來ました。

之に反して私の注意力は引力の研究や力の研究や重力の研究によつて引き締められました。是等の研究は私にとつては生きた學問でありました。何故ならば是等の研究は實際的の事柄にあらさまな關係を持つて居りました。

重學(物理學)では私は何故所謂工率の多くが假定せられ、而して何故數種の工率が斜面の場合に於て減せられないかといふことを解することが出來ませんでした。

私の以前の教育は鑛物學に多くの間隙を残しました。殊に觀察力に關しては多くの間隙が残され

ました。

私は鑛物の標本が好きでした。而してそれらの數種の特徴を理解しやうとして多大の煩勞を費しました。けれども私の不具的な用意を以てして私は自分のなすことに何ともすることの出来ない困難を見出しました。而して私はそれによつて不注意といふことは容易に又速かに矯め直し得らるべきでないといふことを悟りました。

觀察に於ける最も努めたる溫習も私の透察をして私の目的のために爾^{しか}あらねばならぬやうに敏捷に且つ精密にはしてくれませんでした。

その頃私は私の透察力の鈍いといふ事を悟り得なかつたのであります。私は私の透察力を以つて多くを學び得る筈でした。併し私は課業を學ぼうとはしませんでした。

化學は私の心を惹きました。優良な教師（ゴエツテリング）は常に思慮して諸現象の眞關係を證明しました。而して親和力の定論はいたく私の興

味を喚びました。

私はこれらの講義でノートを取らうなどと決して思ひませんでした。何故ならば其場で了解したことは私の智識となり、而して了解し得なかつたことは書き留めて置く價值がないやうに思はれたからであります。

私は前からこのノートを取らなかつた事に就ては屢々後悔して居ります。併しこの點に就ては私はこれまでの經驗上斯ういふ確信を持つて居りません。即ち密接な諸關係に於て全體の主旨を熟知した後には、講義を聞いてゐた時分らなかつた細微な點を眺め返すことが出来。而して會得することが出来るものであるといふことであります。

植物學では私は頭腦の明晰な心の優しい教師（バッシユ）を持つて居りました。この教師の植物の自然分類法はまだ澤山分類されるものが残つてゐると常に氣に掛つてはゐたもの、私に大なる満足を與へました。けれども全體としての私の自然

觀はこの教師の方法によつて漸次實質的に明確になつて行きました。而して仔細に自然を觀察するといふ興味は漸次勵まされて行きました。

私は何時までもこの教師を有難く思つて忘れないでせう、この教師は又私に生理學を教へましたこの教師が教へてくれた二つの原理は異常な力を以つて私を捉へました。而してこの原理は私には明瞭に分りました。

その一つは編物のやうにすべての方面に亘つてあらゆる動物が相互關係を有するといふことの概念でありました。而して他の一つは魚類や鳥類や人類の骨格若しくは骨組が成立に於て皆同一であつて人類の骨格は自然が下級の生物にも作り出さうと努めた基本的典型と考へらるべきものであるといふことでありました。

私は常にこの教師の解明に多大の興味を以つて居りました。何故ならばこの解明は私の理性と感情との兩つながらにある結果を齎すべき觀念を暗

示してくれたからであります。

何時も私が諸現象の内在關係と一致とを把握し得た時には私は私の心靈の憧憬が充たされたことを感じました。

私は以上の他の講義にも出席して容易く理解しました、而して講義さるゝ要旨を包含的に達觀することが出来ました。私は建築の進捗して行くのを見ました、而して建築、栽培等に於て私は手傳ひました。それ故私はノートを取ることが出来ました。而して完全な又意に充ちた講義の備忘録を書くことが出来ました。

エナに滞在してゐる間、私は多くの事柄を教へられました。エナに於て學び得らるべきすべてを殘らず學び得た譯では決してありませんが、而かも尙私は私のために主觀的にして且つ客觀的な立脚地を得ました。

私は既に不同の一致、力の雙關、あらゆる生物の内在關係、物質の生命而して物理學と生物學の原理を認めることが出来ました。

フレーターベル會規則 (抄)

第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
 第二條 本會ハフレーターベル會ト稱シ東京ニ置ク
 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノトス
 第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ齎出スベシ
 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ
 第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ

一、總會、毎年十月之ヲ開キ保育ニ開スル演說、談話、保育參考品幼兒成績物展覽、會務ノ報告等ヲナス

一、常會、毎年二月、六月、ノ第二土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス
 尙毎年四月廿一日特ニフレーターベル紀念ノ爲メ會ヲ開ク

一、組合會、會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスルモノヲ以テ組織ス
 但シ別ニ組合規約ヲ定メテ會長ノ承諾ヲ經ルモノトス

一、雜誌發行、毎月一回雜誌ヲ刊行シテ之ヲ會員ニ配布ス
 一、前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

本會々長 (イロハ順)

井村 くに 池田 トヨ 芳賀 晴

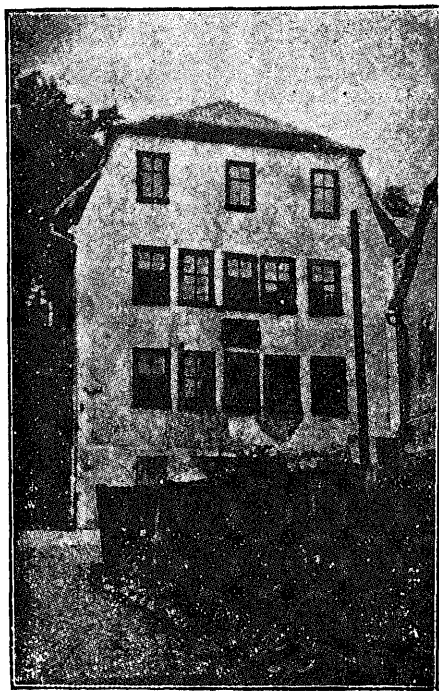
坂内 ミツ 和田 實 和田 くら
 武井 綱枝 岡部 やす 倉橋 惣三
 安井 哲 福田 ふく 小向 きみ
 雨森 劍 坂井 ふで

本會評議員 (イロハ順)

乙竹 岩造氏 吉田 熊次氏 田中 ふさ氏
 野口 幽香氏 横山 榮次氏 藤井 利譽氏
 下田 次郎氏 日田 權一氏

伊澤 脩二氏 巖谷 季雄氏 岩谷 英太郎氏
 波多野 貞之助氏 細川 潤次郎氏 本間 辰藏氏
 戸野 周次郎氏 大瀬 甚太郎氏 奥好 義氏
 尾田 信忠氏 大久保 介壽氏 嘉納 治五郎氏
 唐澤 光徳氏 谷本 富氏 高島 平三郎氏
 棚橋 源太郎氏 多田房之輔氏 田中 敬一氏
 中島 力造氏 中村 五六氏 野尻 精一氏
 野上 俊夫氏 黒田 定治氏 久留島 武彦氏
 松本 亦太郎氏 松本 孝次郎氏 馬上 孝太郎氏
 富士川 游氏 小西 信八氏 淺岡 一氏
 雀部 顯宜氏 櫻井 光華氏 三島 通良氏
 篠田 利英氏 東 基吉氏 瀨川 昌耆氏
 尺 秀三郎氏 菅原 教造氏

明治三十四年二月廿八日第三種郵便物認可(毎月一回五日發行)
婦人と子ども 第十四卷第四號 大正三年四月五日發行



園稚幼の初最のルベール